九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

芥川龍之介の「エホバ」観

林, 薫植
九州大学大学院比較社会文化研究科

https://doi.org/10.15017/15972

出版情報：Comparatio. 2, pp.15-31, 1998-04-10. Society of Comparative Cultural Studies, Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

芥川龍之介の「エホバ」観

林　薫植

《目　次》

1．はじめに
2．聖書のなかのエホバ
［1］天上の神エホバ
［2］エホバと雲の相関関係
［3］「主なる神」エホバ
3．作品の主な問題点
［1］古い鎖と新しい鎖の意味
［2］「主なる神」とは何か
［3］ダンテの救いの意味
4．結びとして
《注》

1．はじめに

日本の大正時代の代表作家である芥川龍之介は、1927年（昭和２年）７月24日未明、ヴェロナール及びジャールの致死量を仰いで自らの命を断った。芥川は死ぬ前日の23日には、彼は一日中書斎に閉じこもっており、その死の直前まで書き上げたのが「続西方の人」であった。だから、芥川にとってこの「続西方の人」は、いわば絶筆の作品となったわけである。ところで、この「続西方の人」は、1927年（昭和２）８月号の雑誌『改造』(1)に発表された「西方の人」の続編で、没後翌月の９月号の『改造』に掲載された作品である。

「西方の人」の擱筆日は７月10日であり、「続西方の人」のそれは７月23日であるので、文字通りの絶筆なのであった。結局芥川は、イエス・キリスト伝である正続「西方の人」を、彼の最後の仕事に選んだわけである。勿論、ここの“西方の人”とは言うまでもなく、イエス・キリストのことを意味している。芥川の絶筆の作品が、「西方の人」というイエス論であったことは、彼の自殺の際、枕頭に聖書が開かれていたことと共に示唆に富んでいるといえよう。(2)　死を直前にしていた芥川は、＜クリストは今日のわたしには行路の人のやうに見ることは出来ない。＞(3)といいながら、聖書に近づき、イエス・キリストに親近感を持つようになったのである。

つまり、この「西方の人」には、芥川の悲劇的な生涯がイエスの生涯に託して語られている。要するに、芥川のイエス・キリスト観が「西方の人」という作品なのである。という訳で、「西方の人」を論じるためには、当然聖書との比較研究が必要条件となるのは言うまでもなかろう。したがって、この拙稿では、聖書と関連づけながら「西方の人」について考察していきたいと思う。具体的には、まず「西方の人」のなかの「20エホバ」を選びたい。というのは、先に触れたように、この「西方の人」には芥川のイエス・キリスト観が述べられているが、聖書はこのイエスについて、主エホバの子であ

るといっているからである。(4)　エホバの子のイエスに関する評論が「西方の人」であるから、その父のエホバに関する考察も、当然価値のあることと思うのである。

「西方の人」（正続）のなかには、＜エホバ＞という言葉は正編の20章と28章の二か所にしか出て来ない。特に20章は、そのタイトルの語が＜エホバ＞であるから、本稿ではそれをもって考察していきたいと思う。という訳で、この拙論の目的は、芥川のそのようなエホバ観の考察にある。つまり、芥川にとってエホバは、どういう意味に解釈されていたかを調べてみたいのである。

具体的には、「西方の人」（正編）のなかの＜20　エホバ＞を選んで、まずは聖書との繋がりのある表現について調べて見、次は作品のなかの主要な問題点別に究めていきたいと思う。

底本は、「芥川龍之介『西方の人』全注解」（吉田孝次郎・中野恵海　著）＜清水弘文堂＞である。

2.　聖書のなかのエホバ

[1]　天上の神エホバ

先にも触れたように、「西方の人」（正続）のなかには、＜エホバ＞という言葉は正編の20章と28章の二か所にしか出て来ない。特に20章は、そのタイトルの語が＜エホバ＞であり、下の引用文はその20章の全文である。

20　エホバ

クリストの度たび説いたのは勿論天上の神である。「我々を造つたものは神ではない、神こそ我々の造つたものである。」――かう云ふ唯物主義者グウルモンの言葉は我々の心を喜ばせるであらう。それは我々の腰に垂れた鎖を截りはなす言葉である。が、同時に又我々の腰に新らしい鎖を加へる言葉である。のみならずこの新らしい鎖も古い鎖よりも強いかも知れない。神は大きい雲の中から細かい神経系統の中に下り出した。しかもあらゆる名のもとにやはりそこに位してゐる。クリストは勿論目のあたりに度たびこの神を見たであらう。（神に会はなかつたクリストの悪魔に会つたことは考へられない。）彼の神も亦あらゆる神のやうに社会的色彩の強いものである。しかし兎に角我々と共に生まれた「主なる神」だつたのに違ひない。クリストはこの神の為に――詩的正義のために戦ひつづけた。あらゆる彼の逆説はそこに源を発してゐる。後代の神学はそれ等の逆説を最も詩の外に解釈しようとした。それから――誰も読んだことのない、退屈な無数の本

を残した。ヴオルテエルは今日では滑稽なほど「神学」の神を殺す為に 彼の剣を揮つてゐる。しかし「主なる神」は死ななかつた。同時に又クリストも死ななかつた。神はコンクリイトの壁に苔の生える限り、いつも我々の上に臨んでゐるであらう。ダンテはフランチエスカを地獄に堕した。が、いつかこの女人を炎の中から救つてゐた。一度でも悔い改めたものは――美しい一瞬間を持つのはいつも「限りなき命」に入つてゐる。

感傷主義の神と呼ばれ易いのも恐らくはかう云ふ事実の為であらう。

本稿の目的は、芥川のそのようなエホバ観の考察にある。つまり、芥川にとってエホバは、どういう意味に解釈されていたかを調べてみたいのである。したがって、エホバとは何か、まずはそのエホバの意味の考察から始めたい。

◇エホバ　Jehovah　：　旧約聖書の神の名ヤハウェを誤って読んだ呼び名。

ヤハウェ神の別の呼び名として用いられてきたが、ヤハウェをエホバと発音したのは宗教改革の頃広まった誤読が原因と言われている。もともと「ヤハウェ」（Yahweh）は、子音文字だけで表記するヘブル語の慣習にしたがって「YHWH」と４文字で書き表されてきたのであるが、「あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。主は、御名をみだりに唱える者を、罰せずにはおかない。」（出エジプト記20：７、申命記５：11）、というモーセ十戒（第三誡）にしたがって、「ヤハウェ」のかわりに「アドナイ」（Adonay、主）という呼び方が用いられてきた結果、長い歳月の間に４文字ＹＨＷＨの読み方が忘れ去られてしまったのが原因である。それでユダヤ教のラビたちが、４文字「YHWH」にアド ナイの母音「ＡＯＡ」を補って「YAHOWAH」と発音する方法を捻り出したという。ただ最初の音ＹＡをＹＥとしたのは、本当の神の名をあくまでも隠しておきたいためだったというのである。（cf.「聖書小事典」外）

◇　ヤハウェ　Yahweh　：　旧約聖書におけるイスラエルの神の固有名詞（→神）。

ヤハウェ、ヤーウェ、ヤーヴェ、ヤーベ　などとも表記される。Ｅ．Jenniの数え方では、旧約聖書中に6828回出てくる。

ヘブライ語ではもともと子音字しか書かないので、神の名は「ＹＨＷＨ」という＜四文字＞で書かれていた（→神聖四字）。第二神殿時代以降のユダヤ人たちは、第三戒（出20：７）などに基づき、神の名を口にすることを敬遠し、朗読する際にもそれを「（わが）主」（adonay）などと読み替えたため、やがてこの神名の元来の発音は忘れられてしまった。かつてしばしば用いられたエホ

バ（yehowah）は、この四つの子音字に“adonay”の母音を当てた誤用である。
今日では、元来の発音は　yahweh　であったとする見方が有力である。
（cf.「旧約新約聖書大事典」）

この誤読はキリスト教会でも、宗教改革の頃から流布され、多くの現代語訳聖書に採用されたが、最近では＜主＞と訳すことが多い。（cf.「聖書辞典」）

「ヤハウェ」という呼び名は、神がホレブ山でモーセに明かした名前「わたしは有って有るもの」＊（I am who I am.　あるいは　I am what I am.）から類推して考察された呼び名。ヘブル語のbe動詞「ハーヤー」（h y h）が読 み方の基本になっている。これに対し「エホバ」（Jehovah）という呼び名は、「主」を意味するヘ ブル語「アドナイ」から類推された読み方で、いまでは誤 読であるといわれている。（cf.「聖書小事典」）

神名ヤハウェの起源については、よく知られていない。ある資料は、モーセの時にヤハウェの名が示されたという（出３：15、６：２、３）が、他の資料は父祖の時代からこの名を呼んだと言う（創４：26）。
ヤハウェは民をエジプトから贖い出した救済の神であり、創造者なる唯一の神であるという神観の確立は、ヤハウェ信仰にその基礎をもつものである。＜ヤハ＞という縮小された形もあるが、いずれも口語訳旧約聖書では「主」と訳されている。（下線引用者、cf.「聖書辞典」）

＊　旧約聖書自身は、ヤハウェの名を＜有りて有る者＞として解釈している
（出エジプト記３：13～15　→13モーセは神に申し上げた。「今、私イスラエル人のところに行きます。私が彼らに『あなたがたの父祖の神が、私をあなたがたのもとに遣わされました。』と言えば、彼らは、『その名は何ですか。』と私に聞くでしょう。私は、何と答えたらよいのでしょうか。」14神はモーセに仰せられた。「わたしは、『わたしはある。』という者である。」また仰せられた。「あなたはイスラエル人にこう告げなければならない。『わたしはあるという方が、私をあなたがたのところに遣わされた。』と。」15神はさらにモーセに仰せられた。「イスラエル人に言え。あなたがたの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、主が、私をあなたがたのところに遣わされた、と言え。これが永遠にわたしの名、これが代々にわたってわたしの呼び名である。）

上の聖書の引用文は、モーセの質問に対する答えとして、神はご自身の名（本性）を

明らかにされる。ここの<わたしはある>とは、「神は過去に存在し、現在も存在し、未来永遠に存在する」の意であろう。神の自存性、独一性、永遠性を表すのに最も適切なことばである。また、神の御名を表す聖四文字ヤハウェに由来するものであると言われている。

以上の調べから分かるように、エホバとは、旧約聖書におけるイスラエルの神の固有名詞ヤハウェの誤読であった。また、創造者なる唯一の神こそ、ヤハウェであるということも分かるようになった。そのヤハウェは創造主であるというのは、あまりにも有名な以下の聖句からも証明できる。

＊　（創世記１：１　→１　初めに、神が天と地を創造した。）

要するに、この神エホバは宇宙の創造主、唯一、至上の神を意味しているのである。

［２］　エホバと雲の相関関係

聖書のなかには、エホバ、即ちヤハウェと雲とはかなり強いつながりをもって現れている。

雲は神の臨在の場所またはその象徴である（出19：９、33：10、詩97：２その他）。すなわち、神のあまりにも輝かしい威光を覆うものとされている（出19：16その他）。

新約でも、神は雲の中から語り（マタイ17：５）、昇天のキリストを受け（使徒１：９）、さらにイエスは再臨の際、雲に乗って来る（マタイ24：30）と言われてある。（cf.「聖書辞典」）

また、「神」と「雲」とにかぎっていえば、ヤハウェをアナニ（雲に乗るものの意味、歴代上３：24）にたとえたり、「流れる雲」にヤハウェの「戦車」（イザヤ19：１、詩篇18：10）をみるなど、「雲」は神の動きを示す詩的な表現として用いられていることが分かる。

イスラエル人がモーセに導かれて出エジプトをなした時、神は彼らの前に行かれ、昼は「雲の柱」をもって導き、夜は「火の柱」をもって照らされた（出13：21、詩105：39）が、この「雲の柱」もそうした表現の一つである。（旧約聖書中に十五回以上用いられている。）

聖書のなかに出てくる、神と雲との主な関連句は次の如くである。

＊　イスラエルを導く。（出13：21－22、民数記９：15－23など）

＊　神の栄光を現す。（出16：10　→アロンがイスラエル人の全会衆に告げたとき、彼らは荒野のほうに振り向いた。見よ。主の栄光が雲の中に現われた。（その他、出40：34など）

＊　神の臨在を示す。（レビ記16：２　→主はモーセに仰せられた。「あなたの兄アロンに告げよ。かってな時に垂れ幕の内側の聖所にはいって、箱の上の『贖いのふた』の前に行ってはならない。死ぬことのないためである。わたしが『贖いのふた』の上の雲の中に現れるからである。」（その他、歴代誌５：13など）

＊　イエスの変貌（ルカ９：34－35　→34　彼がこう言っているうちに、雲がわき起こってその人々をおおった。彼らが雲に包まれると、弟子たちは恐ろしくなった。35すると雲の中から、「こらは、わたしの愛する子、わたしの選んだ者である。彼の言うことを聞きなさい。」と言う声がした。）
（cf.ルカ９：29　→祈っておられると、御顔の様子が変わり、御衣は白く光り輝いた。）

＊　イエスの昇天（使徒１：９－11　→９　こう言ってから、イエスは彼らが見ている間に上げられ、雲に包まれて、見えなくなられた。10イエスが上って行かれるとき、弟子たちは天を見つめていた。すると、見よ、白い衣を着た人がふたり、彼らのそばに立っていた。11そして、こう言った。「ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります。」）

＊　イエスの再臨（マタイ24：30　→そのとき、人の子のしるしが天に現れます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見るのです。）
（cf.ダニエル書７：13　→私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。）

以上調べて見たごとく、旧約聖書のなかで雲は神の臨在を現す共通的なシンボルであった。また、新約聖書でも雲は、イエスと深い関係をもっていた。要するに、雲は神の動きを現す表現と象徴として用いられていることが分かった。

［３］　「主なる神」エホバ

聖書のなかで、「主なる神」とはどういう意味に使われているか、を調べてみよう。

◇　主　：　A適用→・神　　……創３：１－23
　　・キリスト　　……ルカ６：46、ピリ２：９－11

・主人　　……創24：14、27

・父　　……マタ21：29

・夫　　……創18：12、　ペテ３：６

Ｂキリストへの適用；

・ヤハウェと同一視される……ヨエ２：32

・キリストを主と告白する……ロマ10：９

・すべての人が告白する　……ピリ２：11

＊復活と昇天の後、キリストの高くなられた身分への表現；

……使徒２：36、ロマ１：４（cf.「聖書」＜韓国語＞）

◇　主（ヤハウェ）―神の名称

・定義　　……出６：２－５

・初期から知られていた　　……創４：26

・旧約では普通「主」と言われる　　……出17：14

・決まった表現の中で　　……創22：14

・しばしば人名に使われる（ヨシャパテ、エリヤ等）……　列15：24

・キリストに適用　　……イザ40:3、マタ3:3

（cf.「聖書」＜いのちのことば社＞）

◇　主　Lord　：　ヘブル語では「アードン」（´ d n）、神名ヤハウェの読み替えとして　´ d nay　、ギリシャ語では「キュリオス」（Kyrios）。反対語[ヘ] ebed 「しもべ」上位にあるもの。ともに「主」を意味するが、「アードン」がもっぱらイスラエルの神ヤハウェを指すのに対し、「キュリオス」は特にイエスに対する尊称として用いられたところに大きな違いがある。無論僕に対する「主人」を指す用例も少なくない（マタイ６：24、10：24）。しかし聖書では特にイエス・キリストの呼称として用いられる（「主なる神」「主イエス・キリスト」　→ロマ10：９）。

＊ ローマ10：９　→なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。主は旧約聖書における神の称号。したがって、イエスを主と告白することは、イエスを神と認めること。（「聖書」の脚注）

神は世界の創造者・支配者、歴史の導き手として、万物の上に君臨する唯 一の神であり、「主」である。しかし新約では、この唯一の神にささげられた「主」という尊称が、キリストに対して用いられるようになった。

キリストは十字架につけられたが復活して栄光のうちに上げられ神の支配権を

委ねられた「主」と告白される。これは、十字架につけられたキリストが神と等しいかたであり、神であると告白することを意味するので、極めて大胆な告白である。イエス時代、ローマでは皇帝を神と礼拝することがごく当たり前のこととして行われていた。そこでは「皇帝はキュリオス」と呼ばれていたのである。そうしたなかで「イエスはキュリオス」と告白することはローマ皇帝に対するあからさまな反逆罪と見なされ、死罪に当たる重大な結果を招きかねない。イエスを主と宣言することが最初のキリスト教会にとってなぜに重要な信仰告白となったのか。その最大の理由はこうした背景から来ているのである（コリント12：3）。この告白は人間の力によらず、聖霊によって可能となる。人は聖霊の働きを受けるときキリストが十字架の死に至るまで神への従順を全うされたために、高く挙げられ、「天上のもの、地上のもの、地下のものなど、あらゆるものがひざをかがめて」主と告白すべき、栄光の君となったことを知る（ピリ２：６ －11、ヘブ２：10）。

このように、新約聖書は「主」に関するこれらすべてのモチーフを受け継ぎ、それを独自に展開する。新約においても、＜神＞はまぎれもない「主」である。このことは、とりわけ祈りの言葉、啓示の厳かな表現法、そして七十人訳が「主」という神名を強調する箇所においても顕著である。また、ヨハネ的な賛美の言葉には「我らの主にして神（黙４：11）」という注目すべき使い方がある。賛美をもって語られているところの、神による世界創造の事実が、至る所で終末待望の基盤であり、歴史はこうした待望論の中にあって、神が準備した目標を目指して進むのである。（cf.「新約聖書小辞典」、「旧約新約聖書大事典」など、）

以上調べてみたが、結局「主なる神」とは旧約において万物の創造者であるヤハウェに対する名称であったが、新約では、この唯一の神に捧げられた尊称が、特にイエス・キリストに対して用いられるようになったことが分かった。

３．作品の主な問題点

［１］　古い鎖と新しい鎖の意味

作家芥川龍之介は、次のように意味深長な文を書いている。

我々を造つたものは神ではない、神こそ我々の造つたものである。」――かう云ふ唯物主義者グウルモンの言葉は我々の心を喜ばせるであらう。それは我々の腰

に垂れた鎖を截りはなす言葉である。が、同時に又我々の腰に新らしい鎖を加へる言葉である。のみならずこの新らしい鎖も古い鎖よりも強いかも知れない。

まず、「我々を造つたものは神ではない、神こそ我々の造つたものである。」という文である。ところで、グールモンの『対話』のなかには「神『人間よ、誰がお前を造つたのだ』　人間『神よ、誰がお前を作つたのだ』」という文がある（→底本の注）が、芥川はこれにヒントを得て上のような文を書いたと思う。以下、この文の意味を綿密に調べてみたい。

第一に、＜我々を造つたものは神＞とは、神の創造性を物語っているに違いないであろう。神は人間を始めとして万物を造り出した天地の創造者であることは、前に触れたとおりである。しかし、ここでは“神は創造者ではない”と断言しているのである。さらにアイロニカルなことは、反ってその神を我々の人間が造ったと言っているところである。一体これはどういう考えから出た言葉なのか。神は万物の創造者であるというのは、いわゆる神本主義の思想であるが、逆に人間が神を造ったというのは、確かに人間中心の、つまり人本主義の思想からの主張であると思う。　では、人本主義とは何か。これは、言うまでもなくヒューマニズムのことを指すのである。

◇　ヒューマニズム　Humanism　：　ヒューマニズムという語は、語源的にはラテン語のフマニタス　humanitas、すなわち人間性、人類性、人道、さらにくだけた形では人間味といった意味内容をもった言葉から出ている。しいて訳せば、人間性尊重又は人本主義、あるいは人間主義、人道主義となろう。しかしこの語のもっている複雑微妙なニュアンスを生かすたてまえから、最近ではそのままヒューマニズムと用いるならわしとなっている。（「世界大百科事典」参照）

◇　人文主義　：　英語humanism、フランス語humanisme、ドイツ語Humanismusなどの訳語。西欧語をそのまま写してヒューマニズム、ユマニスム、フマニスムスなどと表記されることも多い。その語義は広狭多様で、人間主義、人本主義、人道主義などの訳語もある。　－－－（中略）－－－広義には、ヒューマニズムとは＜人間もしくは人間に関することがらを最重視する精神態度＞と定義されよう。　－－－（中 略）－－－これに対して狭義のヒューマニズム、すなわち人文主義とは、特定の歴史的概念を指す。それは西欧ルネサンス期、とくに15世紀のイタリアを頂点として開花した人間肯定の知的運動で、古代の再発見と結びついて、中世的精神形態からの脱皮を目ざし、地上的人間の活動と人格とを評価し直すことによって、新しい時代の文化・思想を方向づけた。この運動は、フランスをはじめとする全ヨーロッパに広がって、ルネサンスから宗教改革を経て啓蒙主義時代へと発展する、近代的人間観の確立の基軸となった。

－－－（後 略）－－－　（下線論者）（cf.「大百科事典」7、平凡社、1995）

結局人本主義、つまりヒューマニズムは人間性（人性；humanity）の尊重と人間解放を理想としている心的態度・思想であることが分かった。このような思考のなかには、人間は神、教会、組織、物質などに依らずに、みずから自己を形成しなければならない、という人間中心の原理が働いているのである。

ところで、ヒューマニズムの発展過程を見てみると、15世紀イタリア社会に起こったルネサンスの人間解放・個性尊重の大運動が、近代ヒューマニズムの始まりである。15～16世紀のヨーロッパでは、古代の文芸を復興させようとする運動が起こって、中世以来の神学中心の学問システムに反発し、新時代の学者の間では＜人間らしさ＞を尊重して理想的な人間像を作り上げようとしたのであった。つまり彼らは、古代の学芸を復活させることによって、中世教会の権威の下で窒息状態にあった＜人間性＞を回復しようとしたのであっ
た。このような人々を　humanist（人文主義者、人文学者）という。

要するに、ヒューマニズムは、中世のスコラ哲学とカトリック教会の精神的な支配を打破し、古代のギリシアとローマの古典を模範として、教会の権威から独立的な、そして知識と理性による人間像を創造しようとする発展的な思想なのである。

という訳で、＜それは我々の腰に垂れた鎖を截りはなす言葉である。＞というのは、人本主義、すなわちヒューマニズムとつながりのある文であることが理解できよう。要するに、この文は、伝統的で古い中世教会の神学の権威という“鎖”に対する暗示であり、その鎖が切り離されたとは、その圧迫から解放されたこと、つまり人間性の解放を意味していると思う。

というと、＜が、同時に又我々の腰に新らしい鎖を加へる言葉である。＞とは、どういう意味であるか。やはりこの文も、ヒューマニズムのことと関係があると思う。

ヒューマニズムの一般的な意味を、人間を人間らしくする固有な性格、すなわち人間性を尊重する態度・思想であるとすると、歴史的には様々の形態が現れて来たといえる。

古典的教養の復興によって、中世ヨーロッパのキリスト教的な世界観からの人間性の解放を志向する、ルネサンス期のイタリアに始まった思想運動（人文主義）。

17～18世紀のイギリスとフランスで起こった宗教的な権威からの徹底した解放を追求し、普遍的人間という名のもとに自由・平等・友愛という理念の実現を志向する運動（市民のヒューマニズム）。

18～19世紀のドイツでの古典重視、人格の調和的な発展と完成、人間の自己救援を志向する精神運動（ドイツ人文主義）。

19世紀の半ば以後、資本主義による疎外された人間性を、社会革命によって回復

させることを目標とするプロレタリアの運動（社会主義的ヒューマニズム）。→あらゆる文化と価値判断を物質に還元させたマルクス主義をヒューマニズムであるとは言い難いが、ヒューマニズムが遠因になったのは事実であろう。20世紀に入っては、戦争と組織による抑圧からの人間性の解放を志向するヒューマ ニズムの思想が芽生え、これは実存主義と結ばれて発展した。（実存的ヒューマニズム）（cf.「学園世界大百科事典」＜韓国語＞）

以上の様々の例のごとく、ヒューマニズムは各時代に従って、実に多様な思想形態として登場する。しかし、これらの共通点を言わせれば、ただ＜人間らしさ＞の尊重という点に過ぎないであろう。

ところで、20世紀に入ってから資本主義と科学の急速な発達によって蔓延された人間疎外の現象と物神主義の風潮は、人間の自由と平等、尊厳性を阻害するようになったので、これは、人間性の回復に対するヒューマニズムの理想をより一層拡散させる結果となった。

結局、20世紀の人本思想が提起する中心問題は、科学と技術の時代である近・現代社会のなかで人間が感じている疎外の問題であると思う。つまり、科学と技術の発展は、人間に福祉と文明の便利を与えたが、それと同時に啓蒙思想家たちの楽観的な期待に反して、人間の自律性と個性が抑圧される事態を招いたのである。

換言すれば、科学技術の発達は人間を機械文明の主人公にする所か、かえってその機械の奴隷に転落させる、つまり科学技術の奴隷化としてしまったのであった。要するに、世界の合理化・近代化および機械化は、結局人間を非人間化・機械化する過程であったといえよう。

このように、近代社会のなかで人間と人類文明とが直面している危機、言い換えればヒューマニズムの危機を芥川龍之介は指摘し、警告しようとしたのである。先の引用文の＜が、同時に又我々の腰に新らしい鎖を加へる言葉である。＞という文は、そのような危機に対する芥川の恐れの表現であると思う。

ちなみに、＜のみならずこの新らしい鎖も古い鎖よりも強いかも知れない。＞という表現も、近代知識人である芥川の先見の明のある文であったと思う。　というのは、芥川龍之介は＜～かも知れない。＞とはいっているが、今日の現代社会における危機の本質を考えてみれば、“先見者”芥川の“預言”は当たっているからである。

以上の調べから分かるように、結局＜古い鎖＞とは中世ヨーロッパの神本主義の思想であり、＜新しい鎖＞とは人本主義の弊害による人間の機械化・奴隷化を意味していると思う。

［２］　「主なる神」とは何か

しかし兎に角我々と共に生まれた「主なる神」だつたのに違ひない。クリストはこの神の為に――詩的正義のために戦ひつづけた。

既に調べてみたように、聖書のなかでは「主なる神」は、特に神ヤハウェとイエス・キリストの称呼として用いられていたことが分かった。つまり、神ヤハウェは世界の創造者・支配者として、万物の上に君臨する唯一の神であり、「主」である。しかし新約では、このような唯一の神に捧げられた「主」という尊称が、イエス・キリストに対して用いられるようになったのであった。というと、上の引用文のなかで、芥川の言っている「主なる神」とは何か、その意味について調べてみたいと思う。

作家芥川は、＜我々と共に生まれた「主なる神」だつた＞といっている。当然＜我々と共に生まれた＞という表現が問題になると思うが、この＜我々＞を近代的人間観に立っている近代知識人・芸術家を指していると理解することができれば、＜我々と共に生まれた「主なる神」＞とは、結局芥川のような近代知識人にして芸術家たちが絶対視しているものであると思う。絶対視しているので、彼らの「主なる神」になれたのである。という訳で、彼らの「主なる神」、すなわち彼らが絶対的なものとして“神聖視”しているものは芸術家の個性的な創造性に違いないと思う。

これは、＜「我々を造つたものは神ではない、神こそ我々の造つたものである。」＞といって、“我々の創造性”を強調しているところを見ても証明できると思う。さらに芥川は、＜神は大きい雲の中から細かい神経系統の中に下り出した。＞と描写しているが、これもやはり人本主義の立場に立っている文であると思うことができれば、＜神経系統の中に＞という表現は人間の精神活動、つまり近代知識人の知的活動を意味するということも分かるだろうと思う。というと、この場合の知的活動とは、芸術家の創造性であるのは言うまでもなかろう。また、＜しかもあらゆる名のもとにやはりそこに位してゐる。＞という文であるが、これは芸術家による創造性の多様性を意味していると思う。

次に、芥川は＜クリストはこの神の為に――詩的正義のために戦ひつづけた。＞といっている。この＜詩的正義＞という言葉であるが、実はこれはすでにオスカー・ワイルドの「獄中記」という作品のなかに載っている表現である。

> かれの正義はすべて詩的な正義である、まさしく正義とはかくあるべきように。乞食は不幸だったから天国へ行くのである。かれが天国へ送られるそれ以上によい理由など考えられない。（下線論者）（「オスカーワイルド全集　」＜青土社＞、 p.113）

芥川の＜詩的正義＞という表現が、ワイルドの言葉の借用かどうかは別の問題としておきたい。この表現をキリストの憧れ求めた絶対のものと解釈するならば、それはやはり創造性に違いないと思うのである。ただこの場合、一体＜クリスト＞とはどういうものであるか、が問題になるはずであろう。

芥川は＜クリスト＞のことを、＜クリストたち＞（３聖霊）とか＜クリスト以外のクリスト＞（８ヘロデ）、または＜あらゆるクリスト＞（2故郷）、というふうに表現している。これは結局、“クリスト”は一人だけの、唯一の人間ではないことを意味するに違いなかろう。つまり芥川は、キリストは一人ではなく、複数のキリストが有り得ることを明らかにしているのである。要するに、芥川はキリストを唯一性の存在とは見ていないのである。といえば、芥川においてはキリストはどういう存在なのであるか。

芥川の＜クリストはこの神の為に――詩的正義のために戦ひつづけた。＞における＜詩的正義＞を創造性と理解することができるならば、芥川の＜クリスト＞は結局、近代知識人としての芸術家を意味していると思うが、詳細のことは後日を期したい。

芥川においては＜クリスト＞は芸術家であると思うのは、次のダンテのことを見ても分かるであろう。

［３］　ダンテの救いの意味

ダンテはフランチエスカを地獄に堕した。が、いつかこの女人を炎の中から救つてゐた。

芥川は上の本文の如く、急にダンテのことについて書いてあったが、これはどういう訳なのか。周知のように、上記の引用文は、ダンテの作品「神曲」のなかの話である。

ダンテ（Dante Alighieri　;　1265－1321）はイタリア最大の詩人であり、長編叙事詩「神曲」を著して、ヨーロッパ・ラテン中世の文学、哲学、神学、修辞学などの伝統を総括し、同時に踵を接して現れたペトラルカ、ボッカッチョと並んで、ルネサンス文学の地平を切り開いた人物である。

勿論ダンテは、当時はまだ中世に近いキリスト人であったが、中世の精神を総合してルネサンスの黎明期を導いた先駆者であるので、彼の作品の中にはルネサンス文学の兆しが芽生えていた。

既に調べてみたように、最初の大規模なヒューマニズム運動は、14～15世紀のイタリア社会を基盤にしてその幕が切って落とされた。当時のイタリア社会は地理的な、歴史的な、政治的な諸状況の成果として、ヨーロッパ世界の中で最も近代市民社会化の早かったところであった。それゆえ、個人の解放とか個性の完成とかいう要求が強く人々によって意欲されていたので、これをかのギリシア・ラテンの古典文化を媒介にして成就しようとしたのが当時の先覚者たちのねらいとなった。ギリシア・ラテンの古典文化を

深く学び、ギリシア人のように書き話すことができて、人間解放・個性尊重のヒューマニズムを説くというので、これらの人々を“ヒューマニスト”と呼ぶのである。上記のダンテを先達として、
つぎに現れたペトラルカ、ボッカッチョなどが普通ヒューマニストの先駆的代表者と呼ばれている。

単なる人間主義ではなくて、人間性を古典文化によって教養する、すなわち人間性＋古典文化であるというので、この期のヒューマニズムを“人文主義”、その人たちを“人文主義者”と訳すならわしとなっているのである。

というと、芥川が急にダンテのことについて書いてあったわけは、もう明白になったであろう。その理由は、ダンテはヒューマニズム、すなわち人文主義・人本主義の先駆者だったからである。つまり、芥川のこの“エホバ観”には彼の“人本主義観”が入っているので、芥川は人本主義の先駆者であるダンテのことを描写しているに違いないと思う。

次は女の救いのことについて考えてみたい。

芥川は、ダンテは＜いつかこの女人を炎の中から救つてゐた。＞と言っている。このフランチェスカ（Francesca）は、ダンテの「神曲」の地獄篇（Inferno）第五歌に出てくる女性で、パオロ（Paolo）との姦通のため地獄に落ちたという人物である。つまり、フランチェスカ・ダ・リミニはラヴェンナの君主グイド・ダ・ポレンタの娘であったが、ポレンタ家とマラテスタ家の和睦を計るため、彼女はマラテスタ・ダ・ヴェルッキオの息子ジョヴァンニに嫁することとなり、ジョヴァンニはポレンタ家に挨拶に来ることとなったが、武勇の誉れの高かったジョヴァンニも醜男であったので、偽って美貌な弟パオロ・マラテスタを身代りにたてたのである。フランチェスカは輿入れをしてリミニに行って初めて真相を知って悲観したが、そのうち彼女は真剣にパオロを愛するようになり、不義を重ねたため、両人ともジョヴァンニに殺されたという悲劇的な物語の女性である。

しかし、芥川の作品で注目すべきことは、このフランチェスカを＜炎の中から救つてゐた。＞という表現である。というのは、作品の筋のうえではこの女性は必ずしも地獄から救い上げてはいないからである。ただ、彼女の切々たる恋の真情を訴えられて感動に絶えずその始終を聞くという一段があり、そこは作品中の絶唱と称されているのである。(5)

つまり、ダンテがこの女性を救ったとは言えないのである。しかし、芥川はこれをあえてダンテの救いと解した。一体、これはどういうわけであるか。それはやはり創造性のことと関わりがあると思う。人本主義的な立場からの創造性を強調するために、芥川はダンテをしてフランチエスカを救い上げるようにしたのである。　芥川のこのような認識は、＜「我々を造つたものは神ではない、神こそ我々の造つたものである。」——

かう云ふ唯物主義者グウルモンの言葉は我々の心を喜ばせるであらう。＞という本文の冒頭文を見てもくみ取ることができると思う。要するに、フランチエスカへのダンテの救いは、芸術家の創造性に対する芥川の観念の結果であった。

4. 結びとして

本稿は、芥川龍之介のエホバ観について考察するのがその目的であった。

まず、天上の神エホバのことを調べてみたところ、中世ヨーロッパにおいては、聖書のなかの神ヤハウェは万物の創造者であるという神本主義思想が支配していたが、芥川はそのような神学的エホバ観には同意していないことが分かった。芥川はこのような考えを、聖書のイエス・キリストという“人間”の活動を通して“比喩”的に語っていたのである。

芥川は、人間の創造性が徹底的に無視されていた暗黒時代の中世の思想を打破し、人間の個性的な創造性を尊重する人本主義、すなわちヒューマニズム精神の絶対性と永遠性とを信ずる作家であるのを、彼のエホバ観によって知ることができたといえる。

《　注　》

（1）→ 総合雑誌・時局雑誌。大正８・４～昭和19・６（1919～1944）。再刊昭和21・１～昭和30・２（1946～1955）改造社発行。全455冊。東京毎日新聞社長であった山本実彦が創刊。＜菊地弘　外（編）、「芥川龍之介事典」（東京；明治書院、1985）、ｐ．114、参考＞

（2）→ cf. 日本文学研究資料刊行会（編）、日本文学研究資料叢書「芥川龍之介　」（東京；有精堂、1988）、ｐ．121

（3）→ cf. 『西方の人』の「１　この人を見よ」

（4）→ イエスが神エホバの子であるという表現は、聖書のなかには至るところにある。

＜イエスの誕生の予告の際＞→御使いは答えて言った。「聖霊があなたのに臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる者は、聖なる者、神の子と呼ばれます。（ルカの福音書１：35）

＜イエスの十二歳の際＞→するとイエスは両親に言われた。「どうしてわたしをお捜しになったのですか。わたしが必ず自分の父の家にいることを、ご存じなかったのですか。」（ルカ２：49→脚注：母マリヤが「父上も私も、心配して……」と難詰したのに対し、イエスは「わたしが必ず自分の父の家にいる」と主張するほど明確な神の子としての意識を持っておられた。）

＊ 韓国語の聖書の脚注：この句は聖書に記録されているイエスの最初の御言葉である。特にこれは、イエスが神の子であられることを証明する最も大事な句である。－－下略－－＜イエスがバプテスマを受ける際＞→また、天からこう告げる声が聞こえた。「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。」(マタイ３：17)

＜ヨハネの証言＞→私はそれを（御霊が鳩のように天から下って、イエスの上にとどまられること。→論者注）見たのです。それで、この方が神の子であると証言しているのです。」（ヨハネ１：34)

＜悪魔に試みられた際＞→すると、試みる者が近づいて来て言った。「あなたが神の子なら、この石がパンになるように、命じなさい。」（マタイ４：３）

＜悪霊につかれた者たちの告白＞→また、汚れた霊どもが、イエスを見ると、みもとにひれ伏し、「あなたこそ神の子です。」と叫ぶのであった。（マルコ３：11)

＜イエス、海の上を歩く際＞→そこで、舟の中にいた者たちは、イエスを拝んで、「確かにあなたは神の子です。」と言った。（マタイ14：33)

＜イエスの変貌の際＞→彼がまだ話している間に、身よ、光り輝く雲がその人々を包み、そして、雲の中から、「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。彼の言うことを聞きなさい。」という声がした。（マタイ17：５）

＜議会における審問の際＞→彼ら（民の長老会、祭司長、律法学者たち→論者注）はみなで言った。「ではあなたは神の子ですか。」すると、イエスは彼らに「あなたがたの言うとおり、わたしはそれです。」と言われた。（ルカ22：70)

＜ユダヤ人たちの殺意＞→このためユダヤ人たちは、ますますイエスを殺そうとするようになった。イエスが安息日を破っておられただけでなく、ご自身を神と等しくして、神を自分の父と呼んでおられたからである。（ヨハネ５：18)

＜イエスの死の際＞→百人隊長および彼といっしょにイエスの見張りをしていた人々は、地震やいろいろの出来事を見て、非常な恐れを感じ、「この方はまことに神の子であった。」と言った。（マタイ27：54→脚注：イエスの十字架の光景は、処刑に当たったローマ兵をこの告白に導いた。）

＜マグダラのマリヤに現れた際＞→イエスは彼女に言われた。「わたしにすがりついていてはいけません。わたしはまだ父のもとに上っていないからです。わたしの兄弟たちのところに行って、彼らに『わたしは、わたしの父またあなたがたの父、わたしの神またあなたがたの神のもとに上る。』と告げなさい。」（ヨハネ20：17＜ヨハネの福音書の目的＞→しかし、これらのことが書かれた

のは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によっていのちを得るためである。（ヨハネ20：31）

（5）→　私が悩める魂の言葉をきいた後も
頭をたれて長い間あげなかったので、
ついに詩人はいった、「何を考えているか」
返事をする決心がついたとき私はいった、
「可哀そうにどんな甘美な思い、どんな多くの
望みが彼らを悲哀の道へと導いたことでしょう」
そしてふたたび彼ら両人にむかってたずねた、
「フランチェスカよ、あなたの苛責は私を、
悲しませ、同情をひきおこし、涙ぐませます。（117）
だが教えてください、甘い溜息をついていた頃、
愛は何により、またどんな仕方でおたがいの
心もとない想いを伝えるのを許したのかを」
すると彼女は私に、「みじめな境遇にあって
幸福な頃を思いやる以上の苦悩はありません。
それはあなたの先生がよくご存じです。
　―――（中　略）―――」
一方の魂がこのように話している間
もう一方の魂は同情のあまり泣いていた。
私は死にそうになり、気をうしなって
死体のように、ぱったりと倒れた。　　（142）
＜cf. 野上素一（訳）、「世界古典文学全集第35巻　ダンテ」、（東京；筑摩書房、1966）、p．20＞